

## 耳たぶ

日原 正彦

待合室で 前に  
坐ってる人の耳たぶを見ている  
大きな耳たぶだ  
何が入っているのだろう

その人が呼ばれて立ちあがった  
耳たぶは 鳴らなかった  
私はひそかにほくそ笑んだ

それから急に自分を叱った

その耳が 今  
診察室でどんなことを聞いているのか

何もわからないのに  
耳たぶのふくよかなことだけをちよつと羨ましがっているこの愚か者

その人がドアを開けて出てきた  
明るい顔でも暗い顔でもなかった  
大きな耳たぶはやはり二つあって  
二つとも黙っていた

その人の口も黙っている  
黙っていることのなかに  
その人の 今 が しまわれている  
鈍くてもいい  
それが光っていてほしい と 思う

私の名が呼ばれた

私は棒切れのように立ちあがった

貧弱な耳たぶが震える

それを背後から見ているもの

それは たぶん人ではない